

## 地域行政懇談会 開催結果

地域名	尾 張	西三河	新城設楽	東三河
期 日	平成21年9月18日(金)	平成21年9月28日(月)	平成21年9月29日(火)	平成21年9月30日(水)
場 所	愛知県三の丸庁舎 大会議室	愛知県西三河総合 庁舎特別会議室	愛知県新城設楽総合 庁舎第1会議室	愛知県東三河総合 庁舎大会議室
参加者	市町村代表の10名	同左13名	同左8名	同左10名

◇観光振興基本計画（スケルトン）を基に、次のような意見を聴取

### <尾張地域>

- 瀬戸の街全体をテーマパークに見立てて観光の掘り起こし活動を行っている。  
産業としての焼き物という視点からではなく、文化や歴史の視点から焼き物を改めて見直ししている。
- 大きなイベントを行っているが、縦割り行政や行政区域を越えてイベントを行うことの難しさを痛感している。
- ビジネス客や東アジアに目を向けることは良いことである。
- 「愛知の観光の魅力は何だ」と言われてもイメージが浮かばない。
  
- 観光には、「観光する場所」、「宿泊する場所」、「食事」の3つの要素が大事であるが、愛知には観光という意識が低い。春日井と小牧は隣接しているが、同じ日に市民まつりを開催している。開催日をずらして連携すれば、お互いにメリットがあるように思うが、それができていない。
- ミッションをもっとやるべきである。
- 人材づくり、人の育成が大事。観光の意識が強い地域の大学には、観光に関する学部や学科がある。
- 学生のホームステイはよくあるが、大人のホームステイに取り組んでほしい。
- 姉妹都市交流という大上段に構えたものではなく、民間の草の根交流をもっと促進してはどうか。
  
- 春日井には観光といえるものがなく、県外に行く際に持って行く土産品もない。そこで、地域資源であるサボテンを利用した特産品づくりに取り組んでいるが、ただ作るだけではダメで、作ったものを知らしめることが重要である。
- 春日井は交通アクセスが悪い。縦（南北）はまだしも横（東西）が悪い。
  
- 県営名古屋空港は、JAXAの誘致成功や三菱重工の工場があるので、空港を拠点に航空宇宙産業の集積を図り、育成していったらどうか。
- 高知といえば坂本龍馬、鹿児島なら西郷隆盛、松山は俳句の正岡子規である。萩は吉田

松陰である。それらの地域では、いずれも歴史上の人が活きている。愛知も武将観光といっているが、そういう意味ではまだまだ弱い。

- 尾張旭は歴史や文化も含めて観光といえるものがない。ただ、市が WHO に加盟し健康都市宣言をしているので、「健康都市」をキーワードにいちじくを使ったワインや酢などの特産品づくりに取り組んでいる。
- 愛知は祭りの数では全国でもトップクラスであるが、祭りを集客に繋げるための情報発信が、特に関西圏に対して弱い。豊明では桶狭間古戦場まつりを行っているが、リピーター客を確保するという意味で毎年少しずつ内容を見直しており、外に対してしっかり情報発信していかなければいけない。
- 隣接しているのに祭り開催日が重なっているという話があった。豊明の古戦場まつりも隣の有松絞りまつりと開催日が同じであるが、名鉄が実施しているハイキングに取り上げてもらうことで、2つの駅から集客ができるという効果もある。同じ日に祭りを開催しても、やり方次第ではプラスの効果期待できるのではないか。
- 尾張県民事務所の観光まちづくりでは、三英傑以外にも広げた形でモニターツアーを実施しようと計画している。武将観光は掘り下げれば奥が深い。
- 民間の集客施設に対しても支援していただきたい。
- 東郷町は観光資源も地域資源もなく苦勞している。
- 商工会連合会が今年度から武将観光マップの調査研究をしている。県観光協会のホームページには武将に関する情報は多いが、それに比してマップの情報が少ない。
- 武将ゆかりの地を巡る定期観光バスはできないか。それがダメなら、各市町村の巡回バスを相互に連携する形で利用できないか。
- 県外の人に県民が愛知の歴史を説明できるように仕向けていくことが必要である。
- 万博の時に東京で物産展を行ったが、かなり手応えがあった。物産の情報発信を県はもっとやるべきではないか。
- 大都市にアンテナショップを設けてもらおうと弾みがつくので、是非お願いしたい。
- 生徒が犬山城を見学する前に学校に赴いて説明をしている。事前に学習してから出かけると、見方も変わってくる。県でもそういう取組をお願いしたい。
- こういう計画は総花的になりがちである。きちんと絞り込みができるかが重要である。その際には、経済効果という視点も頭に置いてもらいたい。

## ＜西三河＞

- 碧南では陣屋の跡地整備と美術館などハード面は整備されたので、これからはソフト面である。これまで素通りしてきた街について、自動車から降りて自分の目で見て考える。これが歩いて暮らせるまちづくりということである。
- まちづくり委員会主催で町並みウォーキングを開催した。ボランティアの参加や、私鉄主催のウォーキングと併せ1,000人～2,000人の参加があった。時代が変わって活動もマンネリになってきたため、実行委員会で今後どうするか、第一歩として「地元学」を究めていく体制をどうやって作るかを考えることにしている。楽しいからやっているというが、どうも上すべりになっている。観光というテーマがあっても、観光旅行者に感動をもって帰ってもらえるような体制にはなっていない。
- 岡崎は東海道38番目の宿場であるが、それが一つの観光、まちおこしの基盤となっている。たくさんの方が岡崎27曲がりを散策している。秋には岡崎市、岡崎商工会議所の主催でいくつかウォーキングイベントが企画される。これによって町を盛り上げている。
- 刈谷ハイウェイオアシスは、従来のサービスエリアのような立寄地ではなく、目的地型時間消費型の施設としてスタートした。そのため、快適性を重視し環境整備や防犯警備を強化することにより、子どもから高齢者まで安心して過せる施設とすることを第一の運営方針にしている。また、高速道利用客だけでなく、地元の方に利用してもらわないと情報発信できないことから、地元密着という運営方針も立て企画している。

観光旅行者に対して、おもてなしの心をもつ体制が必要である。八丁味噌、碧南の農産物、工芸品など、そこでしか味わえないものを産直市場で実現している。そこに行けば手に入るということでリピーターを生んでいる。

また、女性から好評のデラックストイレについては、管理運営メンテナンスに最大限の費用をかけており、これが広告宣伝になっている。
- 香嵐溪の紅葉は、大正終わりから昭和初めにかけて、住民が植樹した人工的なものであり、これがまちおこしの走りである。足助は塩の道で栄えていたが、明治に入り輸送体系が変わることで町が衰退してしまうということで、客寄せしようとしたものである。

足助のまちづくりは、地域資源を身の丈にあった手作りでブラッシュアップしている。昭和50年には町並み保存、55年には三州足助屋敷など、手作りのまちづくりが全国的に知られるようになった。それに加えカタクリの花を増やしたり、街中で雛飾りを行う「中馬の雛飾り」でまちづくりをしてきた。

このように前半の観光整備は行政が主体となり、平成になってからは住民が身の丈サイズで活動してきた。これが地域の特性に応じた観光地づくりということである。
- デンパークは安城市が平成9年に開設したもので、入園者数は年間50万人、28%が安城市内、95%が県内からの観光客である。最近では、三重、岐阜、静岡の来客も増えている

が、入園者は年々減り続けている。

入園者の減少を立て直そうと、どこよりも人に優しい公園になる努力をしている。公園の中では、楽しさと驚きを与えようと、「おもしろさ、見る、食べる、買う」が体験できるようにしている。デンパークの持つ資源をいかに活かすかを考えた。はすの花の開花時期には早朝の開園、中秋の頃は夜間の開園、春先にはチューリップの摘取り体験も行った。

地元の活性化に寄与できる施設になりたいということから、安城高校生のレシピによる菓子販売や菓子作り教室を開き、ハロウィン時には農林高校生によるトラクターの飾り付けや、ボランティアによる竹明かりイベント、ホテルの飼育も行っている。

デンパークは花と緑の公園ということで、環境の情報発信基地にしようという試みも行っており、落葉プールで子供に遊んでもらったり、園内を走るバスをてんぷら油で走らせ、てんぷら油を持ってきた人には乗車券を渡すなどの試みを行っている。環境に取り組むことでメディアに取り上げられ情報発信している。身の丈に応じて活動をしている。

- 歴史と文化のまち西尾は、江戸時代6万石の城下町である。よくできた街である。城址公園には尚古荘等の歴史的な建造物があり、薪能も行うなど、伝統文化の大きなパワーがある。最近では一万人大茶会を開催したり、地域ブランドとして西尾の抹茶を登録したりしている。

しかし、西尾市だけではパワーが乏しい。西尾の抹茶や伝統的食べ物を食し、一色のさかな広場で海産物を買ひ、吉良で宿泊し、三ヶ根山で三河湾を眺望するなど、皆の力を合わせることで、西尾地域の観光ルートの魅力が出てくる。渡り蟹、島アサリ等季節のものを食するなどのグルメも合わせていけば、素晴らしい地域の特色が出てくる。

- 知立は、三河三弘法、知立神社、カキツバタが観光のメインになっている。また、東海道の宿場町として観光地としてアピールしているが、思わぬ苦戦をしている。弘法さんの日は交通がマヒし、商工業者が苦労している。八橋カキツバタにおいては、花の咲く1か月間、地域の住民は普段どおりの生活ができない。観光と地域の住民の感覚には開きがある。

平成18年、国の「小規模事業新事業全国展開事業」に参加し、弘法大師から宗教色を除き、介護や福祉に携わるロボットをイメージした「こうぼっちゃん」というユルキャラを作った。高齢者に対しても、このようなキャラとの二人同行もあるということで行っている。

また、商店街が機能しなくなってしまったため、一店逸品運動に参加し、そこでやる気のある店主を集め、異業種交流も含めて様々なことをやっている。

- かわら美術館には、年間6万人が来場する。集客のため名古屋の企業を回ったが、簡単には増えない。そこで、汗をかいて動こうということで、年4回の特別展、企画展を企画するとともに、衣浦5市、半田市、東浦町の小中学校や市内6万世帯、県内の体育指導員にチラシを配布し、認識してもらおう努力している。瓦に対する市民の認識を改め、気楽に来てもらえるようにしたい。また、名鉄とタイアップし来館者の増加を図っている。それ

により西三河の観光にいくらか寄与できるかと思う。

館内のショップでトリエンナーレ関係グッズを販売しているが、盛り上がっていない。愛知万博のPRをしたときも、岐阜の人にも届いていなかった。

夏休みに六館刺激ツアーという、有松絞り会館、味の館、酢の里等を回る企画を行ったが220名しか来館者はなかった。

PR手段としてよいか分からないが、西三河地域でスタンプラリーを考えている。

京都で話しをすると、愛知の評判はよいので、もっとPRしたらよいと思う。

- 佐久島には、テレビや報道機関が毎月6～7社取材に来る。島の伝統文化や島にあるものを磨き上げることによって情報発信ができ、島の宣伝をしてくれている。民家の壁を黒く塗る黒壁ボランティアも募集2日で満杯になった。四季すべての自然を相手にしている。アートと自然が脚光を浴び、若いカップルで一杯である。潮干狩り海水浴など、島でしか味わえない雰囲気がある。

今後の観光のことを考えると、地域の旬のものを出し合って、観光を共有していくことが必要となる。観光については、1人のお客さんから何を大事にしていくかという発想が必要である。軌道に乗るまでに3年かかったが、それから後は何もしていないにもかかわらず、6億円位の宣伝効果がある。古いものを大事にして、新しいものを少し取り入れると、観光客が喜んでくれる。そうした島を今はまだ作っている途中である。地域の文化を大事にする地域の人の力を借りて、魅力を大きくしていくことが求められてくる。

- 吉良の観光は厳しい状況にある。吉良といえば、吉良上野介の故郷、吉良の仁吉、人生劇場の尾崎士郎ということで、これらの資源にあぐらをかいた観光事業をしていた。しかし、これらの観光資源を今の若い人は知らない。ただ、吉良という場所は知っているのもので、そういう現状からして観光に結びつけるとすれば、新しい着地型観光ということである。地区、地区で体験できること、目的をもった観光をしようとしてやっていくことである。

吉良で具体的に何をしているかといえば、海岸線を「吉良ワイキキビーチ」という名前を付けて、ハワイアンフェスティバルをやっている。このような試みは、イベントをやった人がたくさん来てよかったとなりがちであるが、それをいかに観光に結びつけるか、どれほど宿泊に結びつけるかということである。お蔭様で吉良を知ってもらい、海ハワイアンということで、他の地域にない部分で特徴付けができて宿泊客も増えている。

歴史的なものでいえば吉良上野介に因んで、旅行社と行政でもう一つの忠臣蔵実行委員会を作り、忠臣蔵のその後の芝居をやろう企画している。

それらのことが、単なるイベントに終わらないよう、吉良上野介にまつわる食べ物を作ったり、名産品のイチゴ、ナシ等の食べ物以外で残るものとして、吉良の赤馬のストラップを作ろうとしている。新しいものを入れながら、やっていかなければ観光は廃ってしまう。新しいものを入れながら、過去の歴史も維持し発展していけばいいのかと思う。遠くから来てもらうためには吉良だけでなく、一市三町、西三河、愛知県という広い地域でやっていくことが必要だと思う。

九州に行ったときのことであるが、観光地図には、愛知県の地図は名古屋以外は原野と

なっている。情報の発信がへただと思う。個々の力は弱い。これからは広い面でやっ  
ていかなければ全国区にならない。愛知はモノづくりのまちというイメージが強いかもしれ  
ないが、これからはモノから人の交流になっていく。これらのことも含めて観光について考  
えていければよい。

- 幡豆の観光資源としては、三ヶ根山にはアジサイ、山モモがあり、秋にはアサギマダラ  
という蝶が飛来する。一年を通した観光ということでやっている。昔は、展望台やロープ  
ウェイがあるなど、県内有数の観光施設であったが最近はいま一つである。愛知こどもの  
国もあるが30年過ぎて以前の賑わいはない。

新たなプラス面では、鳥羽の火祭りが国指定重要無形文化財に指定されたことから、観  
光資源として広めていこうということで取り組んでいる。見物客も年々増え、テレビ等  
でも取り上げられるようになり、今年は9,000人の来客があった。

幡豆は、海があり山があり起伏に富み、民話や史跡も多くあり、ウォーキングコースも  
開発されており、今年度中に看板の設置もできる。今後どのようにしていくかである。観  
光資源という面では、春の潮干狩り、夏の海水浴は廃れていない。

友引市は名鉄電車利用促進イベントであるが、観光客に来てもらうには、鉄道の維持・  
整備が必要である。きら・はずビーチウォーキングは、行きはウォーキング、帰りは電車  
利用という試みである。従来からある電車を大切にしていくことも、地域の活性化の維持  
になる。

- 本光寺は30年程前からアジサイ寺と呼ばれ、本年は6月に5万人の参拝客があった。  
梅、ツバキ、アジサイの花の時期である3月～6月までで8万人が来寺している。

問題は、花を見た人がお寺の次にどこに行くかである。近くの方はよいが、3割～4割  
が県外の方であり、どこで食事をすればよいか、他に花の見えるところはあるかなどの質  
問がある。蒲郡のアジサイの里を紹介したりしているが、一定の時期だけ人が来るのなら  
情報を共有しておれば紹介ができる。そのような情報を共有したいと思う。

古いものにあぐらをかいてはだめということで、若い人の中ではブログが盛んであ  
るので、お寺のことを書いてもらっている。それだけで若い人が多く来るようになった。  
コストをかけない活動をしている。

新しいものを取り入れるということで、若手職人が作っているアート化した仏像を寺の  
一室に展示している。それだけのことで若い人が喜んでくれるし、友達を連れてきてくれ  
る。信仰や花だけでなく、足を運んでくれるような工夫をしている。

インフラ整備でいえば、6月の花の時期は駐車場に入りきれなく、車が国道まで並んで  
しまうので、何とかしてほしいと町にも働きかけている。

境内でまだ遊んでいる所があるので、開発はしないが現状維持しつつ散策路を作り、紅  
葉の山を作ろうと思っている。新しいものも始めなければならないが、今まである自然の  
もの、ありのままの良さも求められている。

今年の春、松平の廟所の調査があり、全国的な話題になった。松平氏ゆかりの市町村に  
情報発信し、幸田町ではイベント等をやっていききたいということである。皆それぞれやり

方はあるが、情報を共有できるところは共有してやっていきたい。

- 三好町には観光資源がない。人口5万7,000人、そのうち商工業者は1,500人で、その半数が自動車関係の仕事をしている。リーマンショック以降売上が6割減少し、現在では7割は回復したが、実情は外国人労働者の人員整理である。7年間に200軒の小売業者がシャッターを降ろした。コンビニや大規模ショッピングセンターがこの穴を埋めている。シャッターを閉めた人は、今までは自動車関連事業に就職している。しかし、これからは今までのように自動車産業だけでは立ち行かない。町内にインターチェンジがあるので、観光の中継地点として食事をしてもらうなり、土産物を買ってもらうなどのことも考えられる。三好町の観光振興に県の協力をお願いしたい。

観光振興は一町だけではできず、広域での連携が必要である。三好町は尾張と三河の境で、事務所単位でいうと尾張、西三河にまたがることが多い。今後事務所間で連携し、県政の中で東郷や日進との関係についてもまちづくり、地域づくりについての協力応援をお願いしたい。

- 基本計画は海外を重視しているように思える。九州では、愛知の観光地図は名古屋だけしか載っていないとの話があった。国内がまず必要である。関東圏、関西や九州で、愛知の観光はこうだということをもっとPRする必要がある。
- ITの活用というが、我々が行っている活動はPRである。ただ、PRは金がかかるからできない。次にとる手がマスメディアで、新聞に出す、テレビに取り上げてもらうことである。旅番組には愛知県はあまり出ない。我々だけではできない。連携して地域の強さ、面白さを作って、三河ならこれ、尾張ならこれというものがあるので、これらを県がうまくメディアに情報発信してもらえるとよい。ロケ地誘致等もまだまだできるのでないか。
- 専門学校で菓子作りを教えているが、若い人は、お寺、神社、城郭の違いが分からない。このような事実は、歴史・文化の上で観光していく、それを土台に菓子作りをしていく我々に大きな課題を投げかけている。どのように教えていくのか。是非、県も子供たちに違いを教えてほしい。外国人にはなおさら教えることは難しい。
- 地域の特性をいかに活かすか。県がいかにつなぎ合わせるかだと思う。西尾でいえば一市三町がパワーアップする力添えをしてほしい。地域が活性化することによって、一つの魅力となる。地域の人に参加することによって、地域性が出て魅力が出てくる。西尾祭りの花火では市の補助は200万円であるが、地元の人が力を貸すことによって10倍の規模にもなる。
- 観光は、特に愛知県は歴史だと思う。歴史の中にいろいろなものがある。新しいものはないがこれが本筋である。歴史の下に新しいものが生まれる。

○ 基本計画は素晴らしいと思うが、これを立ち上げるにはすごいエネルギーが要る。オンリーワンのまちづくりは自分たちでなければできない。行政にはできない。オンリーワンを作れば、いろんなもので連携ができてくる。自分たちがエネルギーを使わないとできない。見様見まねのものは要らない。全国共通のものは要らない。佐久島にしかない、西尾にしかないものを磨いていくしかない。佐久島は自然の中のアートである。もっと広い交流をして自分たちのまち・文化を見ていくことで、自分たちの良さにも気づく。全国そんなに変わらない。その中で生き残っていくには、地方しかないし、自分たちが一生懸命やらないとできない。

○ 愛知県は、無名で影の薄い地域と皆思っているようである。愛知県の観光地図は白地図だといわれたが、そうではないと思う。香嵐溪は知名度がある。東京でも観光パンフレットに出ている。地域地域のよい物を紹介すれば、愛知県は三英傑の出身地であり、よいものをたくさんもっており、卑下することはない。

かつて、愛知県に来たとき、「関東しょうゆ味、関西薄味、手前味噌味」といううどん屋のポスターを見た。愛知県の意識は、東京・大阪を意識しすぎることである。愛知県の観光行政のいけないのは、財政に左右されすぎで継続性がないことである。

○ 中央政府、広域地域政府、地元政府、この関係を見直すときがきたと思う。天下りで交付金を出したというような無駄が多い。地域主権、市町村主権である。どう情報をつなぐのか。つなぐということが県の貴重な仕事である。国、広域政府、地元政府は横並びである。ここで変えなければ日本は潰れる。

## <新城設案>

○ この計画が実現すれば、いい国日本、観光立国宣言の中の日本という立場が、産業として大きく育つだろうと思う。観光立国宣言の中でワン・ツー・スリーという方針があり、海外旅行客を1千万人、国内の移動を2千万人に、それから消費額が30兆円に、滞在日数を2.77泊から4泊にしよう、世界規模の会議をタイアップしようという方針の中で、この基本計画があるが、観光産業として本当に産業として成り立つのかが、今分岐点にあると思う。

かつて、大量小品種、つまり大手又は地域の旅行会社が、大量に特定の地域へ送客したが、今は少量多品種、それぞれ観光客の目的が明確で、自分の目的に合った旅行をするニューツーリズム時代と言われている。それは経済効果が非常に読みづらく、しかも決して経済効果が生まれてくる要素でないことが、非常に問題になっている。例えば、グリーンツーリズム、ヘルスツーリズム、エコツーリズムというすばらしいネーミングを作っているが、その経済効果が生まれているかと考える。

観光というのは、そうした地域資源を生かすこと、もう一つはブランドを作り上げることである。ブランドを作り上げるといえるのは、物産を育てたりB級グルメを育てたりということではなく、人そのものがブランドということもある。そういうことを基に誘客して

経済効果を生み出すというのが、大きな観光産業のテーマであると思う。

ただ、こうした基本的な概念や基本計画をきちっとやっていくには、そういった組織が必ず要る。それを実現するために、今、国が地域で観光圏を作りあげて、ニューツーリズム時代の商品を経済効果が現れる商品にもっていかしている。具体的には、茶臼山が芝桜効果で15万人が来たが、広域ではコンタク長篠は昨年と比べてどれだけ売上が上がっているか、新城グリーンセンターの売上がどうなったか、名倉アグリステーションはどうだったのか、ゆーらんどパル豊根はどうだったのか。そういう広域的な経済効果も含めて協議をして、さらに経済効果を高める組織が要る。観光圏整備事業というのは、滞在日数を増やすことと、大きな目的は東アジアの観光客をどのように奥三河に誘客し、どのようにおもてなしをしようかと考えていく時に、広域的なものの考え方をさらに進める必要があるし、情報発信の仕方もインターネットを活用する事業を広域的にやっていく協議会が必要である。山村振興事務所が開催した「まちづくり推進協議会」では、ホームページの利用方法として4市町村共有で何かできないかということをやったし、4市町村企画課中心の「新城北設楽市町村協議会」では地域活性化について協議した。ビジョンフォーラムでは、観光分科委員会を中心として観光整備事業を取り上げるにはどのような問題があつて、どのようにしていったら観光による地域振興が進んでいくだろうかということと話している。しかし、いつも言われるのは、「ひな壇が代わるだけで出てくるメンバーはどの会議でも同じ人が出てくる会議が多い。」ことである。これは考えないといけないし、いい内容の基本計画ができたので、これを基に同じプラットフォーム、同じテーマで具体的な行動を奥三河でできる協議会が是非必要だと思う。そのためには協力を惜しまない。

基本計画には、奥三河という地域があるんで、これらを基にそうした協議会がスタートできると、大きな世界に情報発信できるような観光地域としての組織が、活躍できる場面が来るのではないかと思っている。

- 基本計画は良くできているし分かりやすいが、その中でこの基本計画、観光による地域振興の理念をどういう形で進めていくかということの確認と意見を述べたい。

「観光振興による地域住民の生活の向上」というモットーは、地域の観光資源を活用して他所からの観光客を増加させ、観光関連業者が隆盛をきたし、地域の雇用の創出や税収の確保ができるということと理解している。それによって関連するインフラ整備が進み、町が成長していくことにも繋がっていく。ただ、今までの地方行政のやってきた観光振興というのは、住民サービスに重きを置いていることが多い。それは地域住民に納得をして喜んでもらうための観光事業という理由付けが多かったように思う。例えば、地元のことであれば、花火大会等に予算を多く使う。それは必要なことであるが、それとは別に観光産業の発展を狙ったものをもう少し色濃く出すべきである。そうした意味では、今回の県の取組には賛成する。

一番問題になってくるのが、観光振興には、住民も一緒になっておもてなしの気運をもつことであるが、それが一番難しい。観光業に携わっている者は、当然、「受け入れる・招く・もてなす」という感覚を持ち合わせているが、それを一般住民も同じもてなす気持

ちになってもらう気運をどうやって理解してもらうか、また、行政として一般住民に訴え続けられるかということが、成功するかどうかの一番の元になる。それができれば観光客が喜び、当然いい結果が得られるであろう。非常に難しい問題であるし、そこがネックになってくるところだと思う。それは当然観光に関係なく生活をしている人にとって、邪魔なものになる可能性があるということである。観光客が来るからゴミが増えるとか騒音がある、そういうことで来てくれない方がいいという、そこに生活する人たちもいるわけであるから、その人たちにどう理解を求めて、観光施策をしていくのかということが非常に重要である。それについて、行政がどれだけの覚悟と方策をもって当たれるかということが一つのキーワードになる。

仕組み、組織体制についてであるが、普段から商売上のつながり、ビジョンフォーラムで論議をしているところであるが、特に観光業者や関連団体、行政担当部署がどのように連携するかということが非常に大切である。理想論としては一元化して風通しのいい情報が流れる仕組みがほしい。ところが現実には、新城の場合、例えば商工観光課が行う観光関連事業、企画課が行う観光に関連した事業及び組織団体、あるいは都市計画課が関わっている観光の都市整備、それに関する団体、すべてがばらばらの部署で行っている。その風通しをどうやって良くするのかということが必要で、例えば芝桜の規模のものが新城に居ながら設楽の情報や豊根の情報が正確に流れていない。そのためにそういうものを一元化した組織体制というものができなければ、情報の集約・連携を良くすることや、風通しを良くすることはできないと思う。

基本計画に奥三河という地域を入れてもらって安堵している。観光圏整備に全国で16か所ほど提案したそうである。東三河という地域が人口や財政規模からするとそれだけの大きさが必要ではないかと思われるのは当然であるが、地域特性、環境的な問題を考えると、奥三河というのを一つの括りにするべきと考える。三河湾の海の環境や豊橋の都市部とずいぶん違う。特異な奥三河という文化民俗芸能というのものもあるから、括りとして分けるべきではないか。奥三河という分け方をすると、非常に連携というか、自分たちが奥三河の人間というのが新城の人も豊根の人も共有できる範囲ではないか。その区域が人口は少ないかもしれないが、範囲的には面白い範囲であるのと、隣の長野県と静岡県に隣接していることが非常に良いのではないかと思う。是非、地域特性を生かした基本計画を作っていく必要がある。基盤になる県の基本計画はそれでいいが、それを利用してこの奥三河がどうするのかということこれから具体的に論じていく必要がある。

外国からの観光客の話をする、現状は中国人が非常に増えているし、これからも増える可能性がある。中国人の日本に来る観光はまだ「見る観光」である。目的は東京ディズニーランド、富士山、京都で、成田空港に到着して成田に一泊、次に東京に泊まる。理由は東京ディズニーランドで、3泊目は石和温泉か箱根が多い。その理由は1回だけ温泉に浸かりたい、和食を食べたい、この間1泊2食で非常に安価である。富士山を見て、京都に来るが、京都は宿泊が取りづらかったり高かったりするため、豊橋の日航ホテルに泊まる。理由はもう一つ、イトーヨーカドーで電化製品の買物ができるというのが大きい。それで最後は京都を見学し関空近くに泊まる。京都から新大阪まで新幹線に乗るオプションがついている。愛知県は通過しているので、この観光客をこのパターンの中のどこにはめ

るか、温泉か、電化製品を買えるホテルかどちらかである。

それから韓国人の旅行の傾向といえば、韓国人は日本に何度も来ている。今、韓国ではゴルフ料金が安いから、日本にゴルフをするために来る人が増えている。その中でこれから何を求めるかという、日本人の生活であり日本食がブームである。刺身、会席料理が大好きで、非常に憧れをもっている。韓国人の中間層以上であると、ゴルフと和食の会席というのがキーワードになっている。それがアジアの人の傾向であるから、そんなところに絞る方がよい。もう一つ、奥三河が韓国を狙った方がよいと思うのは、民俗芸能、特に太鼓と踊り系は韓国からの流れを汲んでいるものが多いと聞いており、設楽の太鼓を見せると感動し喜んでもらえるので、韓国の太鼓の文化と奥三河の文化と交流させることは非常にいい。日本で体験や研修をさせてくれる施設がないか、学校同士が交流できないか探している、これからのキーワードにしていくのがよい。

一昨日新城ラリーが行われた。新城がDOSアウトドアスポーツという地域活性化で行っているものであり、全日本選手権第7戦で観客が2日間で1万8千人。第6戦は愛媛県で600人、この違いは日本の中心部でアクセスがいいということである。なぜラリーかという、ラリーは世の嫌われ者で、警察の許可、住民の理解が得られず、山里深いところで夜中に競技するのが元々のことだったそうである。ところがDOSというトップに近いようなものを内閣府から得ているため、新城では街中に比較的近いところで開催できる。せっかく来た1万8千人を地元の経済効果に波及できるような仕組みがないため、これからそうした取組を行っていきたい。商工会で今回取り組んだ全国展開プロジェクトにおいてセミナーなどを行っているが、横の拡がりほとんどないというのが現状である。

- 道路標識がとても悪く県外から来られたお客様が、「愛知県は人にやさしくない」という意見がいっぱいある。夜7時～8時に湯谷温泉に到着予定のお客様が、橋のところに看板がないため東栄町まで行ってしまい、結局夜9時～10時になったことがある。また、60才を少し過ぎた女性の方が国道151号の反対側の裏道をいらっしやっただけであるが、途中で「飯田浜松方面」と書いてある汚い看板があり、その看板のところを右に曲って行ってしまったら、行き止まりでほうほうの態でバックして来たとおっしゃっていた。また、九州からいつもいらっしやる方は、作手を通して豊田に行くつもりが、夜であったため鳳来へ戻ってきてしまったと言っておられた。真っ暗で標識はなく、心細くあんないやな思いはしたくないとおっしゃっていた。おもてなしとあるが、道が不案内だとすごく不安になるので、原点から見直していただき、いやというほど看板を立てていただきたいと思う。

お客様が来られて「愛知県は本当にいいところだな」と言うことは、お客様に安心感ができることである。おもてなしは、旅館のおもてなしは言うに及ばず、地域住民の方も大事だと思うので、例えばニコニコ運動を実施して、どんな人に会ってもニコニコしようとか、ガイドする知識を入れて案内する。我々も勉強不足であるので、豊富に知識を仕入れてニコニコすると皆さんいい人だねと、土産屋さんで一生懸命サービスするとか、これは原点の原点でいろいろあるのであるが、まずそれをするには元気が一番大事だと思う。お客様に心から接して、ニコニコして頑張っていければ、愛知県はどこへ行っても看板はいいし、人はいいしということから始めたいと思う。

愛知県はすごくいい温泉がいっぱいある。湯谷温泉は歴史が1300年位あって素晴らしい湯であるが、やや収容力が少ないので、これから何とかハード面を追々やっていきたいと思っている。

花いっぱい運動をしたいと思うが、また情報交換が少ないので、各地域で観光大使を選出して地域情報を話し合ったらよいと思う。我々はこの地域で一生懸命宣伝したいので、観光大使を選んでほしいと思う。

原点の原点は、お客様が一番喜んでいただける、観光客に優しい県だというように是非していただきたいと思う。

- 奥三河ふるさとガイドを10年、11年位やっており、まだまだ20年、30年、40年とやりたいと思っている。観光産業を応援できるグループを作りたいと思っており、今日の提案は1点に絞った。

近年の科学技術の発達は著しく、先進国では地球環境・世界経済・戦争や災害など、世界中の出来事が各家庭に詳細に伝わってくる時代となっている。その反面、人間社会の文明が栄えるほど精神的に疲れている人が多い難しい社会となってきた。そうした社会での観光振興は心のケアとしても大きく役立つと思う。

そこで私達のできることを考えると、日本全国どこでもその土地の良い所はたくさんあり、この奥三河にも多くの文化遺産や伝統的な祭、そして自然環境が多く残されている。これをうまく利用していくことが大切だと思う。奥三河の地域性を生かすにはどうしたらよいか。それには地域の人達が中心となり、それぞれの地域を応援できるように関連付ける仕掛人が必要と思う。そうするには各地域の事情を詳しく知っている紹介者、ボランティアが必要になる。こうしたボランティア組織を作ることも良いかと思う。時代の流れをつかみ、これから先、人々が何を求めているかを読み取ることが必要だと思う。自然保養地(滞在型)、例えば生活習慣改善に取り組むことで心のケアができることも必要である。地域の人が参加して持続していけるようなボランティア組織を育てるようなビジターセンターも必要となる。組織には行政が必ず応援をしていくのも必要かと思うが、行政からのアドバイスによってボランティアグループを、より向上心のあふれるグループにしてもらうことも必要である。しかし、行政からの金銭、例えば補助金などは出さないでほしい。こうしてできたグループは好きな者だけしか集まらないグループであっても、大きな力となって持続可能である。

そのグループを一つ紹介したいと思うが、そのグループは箱根地区のパークボランティアといい、環境省が作り上げたグループである。このようなグループを県が立ち上げてもらいたい。奥三河に是非こうしたグループができるような、拠点を設けていただければ、その拠点を中心にいろいろな地域の応援が出来ると思う。

奥三河は全国的に見ると普通の土地である。自慢できるような所はない。2度、3度来ていただくようなことは非常に難しい。当たり前のことをやったら絶対に無理である。それが証拠に奥三河の人口の減少があり、全国一という少子化、過疎化である。これを乗り越えるには気概を大きく持たなくてはいけない。この時代を見るには、全国を研修して回って、地方のいい所を選んで持ち帰って、さらに工夫して取り入れる。驚くことにこのグ

グループは全部自費であり日当も出ない。そうしたグループを実際 20 年間も続けている。

こういったグループが、私たちにもできるのではないかとということで、是非県にお願いする。奥三河の拠点となるビジターセンターを創り用意してもらえば、そこで活躍したい。なぜ行政に関わってもらおうかという、個人の団体というのは信用度が薄い。個人でやるというのは難しいところがあるが、県とか環境省が応援をしてくれる、もしくはそういったところが作ったグループでは見方が全然違ってくる。

先進事例として田峯に住宅地の取組があった。10 年前やろうとしたときは 10 人が 10 人失敗するからやめろという。ところが 10 年経つてくると、かなり成功に近づいたとして、今度は周りの人たちが一斉に先進事例ということで、近づいてくるようになった。

このように、思いもよらないということが奥三河にとっては今必要かと思う。

是非、奥三河にボランティアグループの拠点、ビジターセンターを用意してもらえば、いい方向に進めて行けると思う。

- 観光というのは即効果が出るものではなく、どちらかというと即効性があるものではない。芝桜が成功したが、草木であるので早く実現できた。観光としては早い実現である。

実現したいことは、国道沿いから見える山々の尾根の上の部分、杉檜を止め広葉樹にしたらどうかということである。頭の中で想像しただけでも素晴らしい観光開発に、車窓から見える素晴らしい地域になるのではないかと。これは絶対にいいと思うので、大規模な開発になるかもしれないが考えてほしい。香嵐溪もそうであるが、最初はそんなに目に見えた効果はない。けれども必ず良くなる。それを実現するための最初の突破口というのはなかなか見つからない。難しいが奥三河の場合はそれがいい。そういう案を気に留めてほしい。

外国からの客を受け入れる体制づくりとしては、設楽町、新城市のみならず、奥三河のエリアで考えるのはよいが、他のエリアと連携するようなことが大事だと思う。

奥三河の場合は伝統芸能が盛んであるが、花祭りは東京へ行ってもかなりの人が知っているし、神社関係は皆知っているかなり有名な祭りである。それがまだ生かされていない。伝統芸能は目に見えない、派手さがない。歴史を分かりやすく伝えるような PR というか、それを分かりやすく伝えるような方策がほしい。

田舎であるので農産物のブランド化、これはマスコミを通じて PR して作り上げていってほしい。そのためには観光協会のこういう委員会から発信した、というルートを作って確立したい。

- 健康ブームで東栄町岩山に観光客が来るようになったので、間違わないように山登りしたり安全に登れるよう、案内看板やパンフレットを作り取り組んでいる。

さて、観光振興に対する目標、方針であるが、施策体系案の中で、「県民参加のおもてなしの促進」が入っている。観光業者には当たり前のことであっても、一般の方にはおもてなしの心を持ってもらうのは非常に難しい、という話があったが、私も感じている。

しかし、この方針のとおり、県民自らが自分の住む地域を創意工夫しながら、主体的に観光振興の活動に取り組んでいくことは、大切なことだと強く思う。時間もかかるし、でき上がったものはすばらしいものでなくても、汗をかいただけ苦労しただけ愛着が湧くものにな

るのではないか。

東栄町では 10 年ほど前に、道路奉仕作業や敬老会という行事が地区単位から区主催に替わったが、当初町が地区に仕事を押し付けるといような反対意見もあった。10 年位経ってみると、それぞれの地区が温泉や廃校になった小学校を活用して敬老会をやるなど、いろいろ工夫してやっている姿や草刈したりする姿を見ると、とてもすばらしいことだと、すべて行政が至れり尽くせりでやっていく形ではなくて、区長あるいは組長等が中心になって取り組んでいく考え方を是非推進してほしい。

さて、観光振興の取組であるが、中設楽地区では「東栄町元気な地域づくり支援事業」という事業がスタートして 4 年ほど経つが、地区で 30 人ほどの組織を作り 5 年計画の事業申請をして、100%東栄町が支援してくれるという事業がスタートした。その助成を受けて、お奨めスポットを整備したり、看板やマップを作るという取組を準備しているところである。今年 2 月に、県史蹟の設楽城跡に看板を立てる作業を専門部会の 7, 8 人と一緒に行ったが、自分たちで苦労して作り上げただけにでき上がった看板には愛着がある。ちなみに平成 20 年度は 18 基の看板を作ったが、今年度は 37 基作ろうとしている。

なお、作成される県の観光振興プランだけでなく、付録としてでも全国の成功しているモデル的な市町村、あるいは小規模地区の意欲的な観光振興の取組例も資料として載てくると、非常に参考になるものになるのではないか。

3 つの具体的な提案をしたい。まず 1 点目は観光振興の啓発活動であるが、県がやる大切な仕事の一つは、それぞれの市町村の観光振興あるいはそういう取組等について、他の市町村へ紹介することである。市町村の規模別、小規模の地区の意欲的な観光振興の取組の紹介や発表等の啓発活動をお願いしたい。新聞に豊根村ではこんなことをやっていると紹介してもらうのもいい。また、県の広報誌等での紹介や啓発活動をして、住民自らがおもてなしの心をもってもらうことがとても大切なことだと PR、あるいは実践報告会等も調べていただけるといいのではないかと思う。

2 点目は、体験滞在型プランと広域連携の大切さであるが、これからの観光振興は、温泉に来てお風呂に入って帰ってしまうだけの観光よりも、滞在体験型プランが大切ではないかと強く思う。その地に数日間滞在して、普段できないような魅力的な体験を地元の人とも交流しながら過してもらおうようなことが、観光には非常に大切な時代が来たのではないか。特にこうしたプランは 1 市町村だけではできないことだと思うので、広域で連携してやっていただけたらありがたい。東三河広域協議会が平成 21 年度からシニアフレッシュ事業奥三河というものをスタートしたが、是非そういうものを県としても支援推進してほしい。都会の方を田舎に招き、最終的には住んでもらう。空家を活用することは大変すばらしいことである。信州四賀村ではクライנגルデン、農園付き貸し家ログハウスを年間 20 万円程度で貸してくれるが、農園が付いているので都会の人がそこに来て体験してもらい、その地が気に入れば永住してもらおう。定年退職後は都会の生活よりも田舎の方が体を動かすのにいいという人が来てくれる可能性が大きいので進めてほしい。

最後に、中設楽地区の例であるが、数年先に花祭りが世界遺産に登録される可能性が出てきたということが新聞で報道されているが、観光客が大勢来て困ることは、駐車場とトイレの問題である。小学校が廃校になって更地になっているので、そこに観光バスが 20、30 台

入れるスペースがある。なだらかに入れるよう整備してもらえば、非常に安いお金で観光バスが入れるし、小学校から舞戸までは5分で行けるので、町と県で是非早く取り組んでほしい。住民としてはそうした駐車場、トイレの問題、それから道の駅は東栄町にはないので、三輪地区の直売所の辺りか中設楽の信号の辺りには、道の駅を造るだけのスペースがあるので検討し、経済的に弱い東栄町を支援してほしい。

それ以外に、設楽城跡に近く観光バスを止めるところがないので、駐車場やトイレの整備を支援してほしい。岩山の登山客のため駐車場整備の支援してもらえばありがたい。県民の健康づくりのためウォーキングや登山等を推奨してもらおうとともに、地域住民が、自然豊かな山間部をセラピーロードとして癒しの道を作る取組をしているので、それに対する整備活動、あるいはパンフレット作成、インターネット発信に対して支援してもらえるとありがたい。

- 計画策定に当たって、奥三河に相応しいしっかりした方向性をもったもの、具体的なものを示していただければと思っている。

茶臼山高原は観光開発が始まって 50 年以上経つ。スキー場ができブームもあり一時期は 40 万、50 万人に近いお客様が来ていた。平成 17 年、18 年においては年間を通じて半分となった。その原因は、スキー客の減少は全国的なものであるが、趣味の多様化、新しい観光スポットの出現、経済の景気の動向の影響など様々な要因が重なっている。茶臼山高原にある自然だけでは足りない部分があり、お客様のニーズに答えられてなかったというのが減少の原因と考えている。何とかしなければいけないということで、出てきたのが芝桜公園の計画である。

茶臼山の場合、冬と夏という 2 つの柱でお客様を集めていたが、天候に左右され雨が降って霧が出ればお客様はまったく来ないという運営的にも非常に不安定な要素があった。それに左右されないようなものということで出たのが芝桜である。平成 19 年より県の支援で、芝桜の 5 カ年計画を考え現在 3 年目の植栽が行われている。観光客は、昨年芝桜時期で 5 万 4 千、今年度で 15 万 7 千と約 290% という、想像できなかった多くのお客様のご来場をいただいた。特定の日曜日には周辺で混雑を招き、場所によっては渋滞等ご迷惑をかけた。当面の大きな問題は交通問題である。今年の例でいうと、来客数が 1 万人を超えたのは、3 日、4 日あったが、そのとき高原道路が渋滞で繋がったような感じになった。シーズン後、検討しているが、茶臼山には駐車場、運動場だとか空いたスペースなど入れて約 1,000 台の駐車場がある。これに誘導する仕方も不手際だったことを反省材料にして、来年の誘導の仕方を考えているところである。道路沿線の施設の皆様と連携を取り合い、渋滞情報や駐車場情報等の連絡網を作りたい。また、インターネット等を通じた皆さんとの共通ネットができれば、茶臼山の開花状況、道路状況等も随時提供できると考えている。

高原道路が昨年からは無料化になり、お客様がいらしていただける大きな要因だと思うが、無料化になり来場者の方も高原道路を使った割合が非常に多い。今、県で国道 151 号方面からの道路を改修してもらっているが、一刻も早くして改修してほしい。芝桜に来られるお客様は年配の方が非常に多いので、必ず高原道路を案内するが、151 号からも楽に上がれるよう道路が良くなれば、交通の分散という見地からも是非県道茶臼山線の改修をお願いしたい。

151号へ誘導すれば、沿線の経済的波及も上がるのではないかと、高原道路で来てまた高原道路で帰ってしまうのではなく、周遊型の案内ができるのではないかと。

これで2年、入場者は右方上がりであるが、いずれピークが必ず来る。その時のためにどうするのか。また、一定数のお客様を確保していくにはどうしたらいいか。

今から、そのために時季に合ったイベントの開催、地元の農林産物の物販など、皆様の意見を聞きながら考えていくのであるが、地場の物を食べる場所の提供が必要と考えている。昨年8月、地元グループに呼びかけ、地場の物を提供するため茶臼山高原へ出店をしてもらったが、来年以降も考えていければと思っている。問題は、豊根村の中で農林産物を作る方が高齢になり少ないため、安定した供給がないということ、需要があるのに供給がないというジレンマもある。今後、作る方と話し合いながら、いろいろな種類を作るとか、量を考えてとか、せつかくいい機会であるので進めていきたい。

その他観光する所はないかとよく聞かれるが、やはり花はすごく喜ばれる。奥三河の各所に花の場所がこれからできてくれば、花を使った周遊コースだとか、お客様に周遊の提供ができるかと考えている。

基本計画の中にある「おもてなしの心」というのは大事なことであり、地元の方が再認識して、お客様におもてなしの姿勢で帰っていただきたいと思っている。

渋滞に関しては、各国道に電光掲示板が出るが、例えばそこで茶臼山方面渋滞中だとか、そういう表示がご協力いただけるのか。また、冬に除雪の不備もよく言われるので、冬のフォローもご協力いただければと思う。

今、自然散策のブームの中で、花というのはお客様を誘致するには、大きな有効な資源である。特に茶臼山の場合、萩太郎の1300メートルの山頂というロケーションとマッチしてお客様に受けたのかと考えている。

- エコツーリズム、グリーンツーリズムなど観光の志向、関心の部分で話が出ていたが、特に奥三河は健康と癒しの志向について非常に豊富な資源をもっている。

20年ぶりに戻って来たが、奥三河を走ってみてもほとんど変わっていない。その辺のところをどうのように捉えていくかであるが、今回策定する計画の方向性は間違っていない。特に区域をぜひ奥三河という部分で括ってもらい、今後、観光の振興、人材の育成、いろいろな部分が出てくると思うが、トータル的に判断してほしいのは、官の考え方、民の考え方というのはあるので、是非それを吸い上げ生かしてもらうような仕組みを作ってほしい。

広域観光というのは、非常に重要である。また、情報が伝わっていないのを感じている。愛知県の場合はすごい武将が3人出ている。情報発信を連携しながらやっているが、愛知県は観光が下手というのを感じる。愛知県からの情報が伝わってこないということ、特に首都圏のマスコミの方が言っている。名古屋のテレビ局や新聞社への発信も大事だと思うが、民間を含めて是非首都圏の方に、情報発信をする手段を構築しなければいけない、情報の発信はまちがいなく東京だと思う。

奥三河は地域資源が自然という面では豊富にある。健康・癒しの志向の部分で、特に中高年の方が多いが、ウォーキング、トレッキングというのが非常にブームになっている。奥三河には800メートルから1000メートル級位の結構いい山がある。地元の町村という部分に

なるが、雑誌でこんな山という形で紹介され実際にその場所に行くと、駐車スペースがない、鎖場の鎖が切れている、階段の木柵が折れている、そういう山がある。観光、山登り、トレッキングなど趣味をされながら、しかも健康ということで奥三河へ行き登って見たけれど、何だという話になってしまう。是非環境整備をしてほしい。

最後に具体的な提案であるが、奥三河の今後の観光というのは、花がキーワードにくるような気がしてならない。花というのは一年中咲くものではなくて、その時季に咲く本当に旬を味わえるものである。設楽町にはしだれももの非常にきれいな所があるが、ダム観光の中でしだれもものを芝桜に負けないようにやりたい、と町長が言っていた。新城桜淵公園の桜、東栄町のやまゆり。自然を破壊するのではなく、自然の中に溶け込むような形で花を整備すると、観光される方、癒しを求めに来られる方が、春の桜から夏のやまゆりまで、奥三河に来れば単発で終わらなく連続して見られる。私が一番願っているのは、来ていただける方が当然多くなれば、特に民間の人達というのは、当然商売というのをいろいろなことを考えながらやっていかれるので、地域に対する経済波及効果が見込まれてくる。これからの観光とは旬を楽しむということで、花をキーワードにして奥三河の活性化が図れないか。

## <東三河>

○ 数字目標がきちんとしていることが大事である。蒲郡市が他と違うのは、市長のマニフェストがあることである。一昨年の選挙で、観光宿泊客2割アップという数字がきちんとして出ているため、毎年度予算が議員も納得し他が減額されているのにきちんとしている。

今日、聞きたいのは、過去の計画と今年作ろうとしている計画は何がどう違うのか。例えば、インバウンド誘致とかコンベンション誘致だとかあるが、これは過去も出ている。その結果がどうで、今度、新しくこういったことをやろう、これができなかったからこうしていこうと。

2点目は、是非、数値目標を入れてほしい。国も観光立国に当たって、アウトバウンド2002、インバウンド2002、滞在型をどれだけにしようとか。数値があって、蒲郡市も宿泊をどうするかというものが、皆さんからも協力があり、議会も市も旅館、施設も生きて行くという点で数字目標をきちんとしてほしい。

「おもてなし愛知」というのは大変重要であるが具体性がない。ボランティアガイドの数も、登録だけして運動していない人を含んだものである。豊橋市の「ほの国検定」があるが、蒲郡市でも「蒲郡観光交流おもてなしコンシェルジュ検定」を始めた。受かった方々がボランティアガイドの講義を受けボランティアガイドとなる。ラグーナ、宿泊施設、中部空港等でお客さんにアンケートを取って何が劣っているか、どこの地区が劣っているか。こういったものを基に次の会議を開くと、例えばガソリンスタンドの対応が悪かった、次から気を付けなければいけない点が判明する。ある旅行社が全国の宿泊客からアンケートを取っていて、全国平均は80点であるが、愛知県は75点で蒲郡地区は何点でという、こういった数字がその社の全店で分かる。それに基づいて宿泊先を選定しており、「おもてなし愛知」をやるとしたら具体的にどうするか数値化してほしい。

「非常に満足」が現在16%なら、これを5年間で5割にしようという数値目標を立て

てほしいという意味である。今から5ヵ年で作る数値目標というのは、こういう過去のデータごとにここまで上げるというように作ってほしい。

- 観光客が見たいのは、豊橋の場合、葦毛湿原、吉田城址、二川宿本陣の3つで95%位になると思われる。それ以外にもあるが、他は金太郎飴の一つでありあまり魅力がない。一番人気の葦毛湿原でも、放っておくと湿原でなくなってしまう危惧がある。どういうところが維持管理をして、どのような体制がとられているのかということ。現在入場料を取っているのは二川宿本陣だけ。これでは、豊橋の観光施策はとれないだろうし成り立つのか。

誰が、葦毛湿原を守って、誰がガイドをして、誰がインカムを活用するのか、吉田城址にしても、市の施設でも県の施設でもなく、市が駐車場をコンクリートに変えてしまい、市民は反発しているが、これを何処にもっていったいいのか分らない。

実態を把握し、どう産業と結び付けて行くのか、もう一度見直していくことが大事かと思う。

2点目は、ポーランドに長く行っていたが、当時、共産圏で酷い国であった。トロンという小さな町で6年暮らした。当時は、観光のことはまったく言わなかった。1989年にソ連が崩壊し30年振りに出かけてみた。その町全体が世界遺産になっていた。先生が、ポーランド中の子ども達に見せたいと、子ども達を連れて遠足や旅行に来ていた。

葦毛湿原でも、先生が勉強され、地元にもこんな良いところがあり自然があるのだということで、遠足でも連れて行ってもらえれば、地域に対する誇りを持つことにも繋がるではないか。そういった施策も考えてもらえたらと思う。

- テーマパークの現場にいと、観光振興の取組がまったく感じられない。何をどのように取り組んでいるのかまったく伝わってこない。県西部では取組が進んでいるように感じられるが、東三河ではまったく実感できない。インバウンド誘致について、静岡県では静岡空港オープンに伴って観光客誘致に県全体で力を入れていると聞くが、愛知県ではセントレアという大きな空港があるにも関わらず、インバウンドへの取組が弱いように感じる。

魅力ある観光地づくりのためには、宿泊客に来てもらうためには、楽しい場所にしていかなければならないということで、単に泊まる場所ではなく、楽しんでもらえる場所が必要になる。そのためには、エリアを広め選択肢を広げることが必要かと思う。近隣市町村と連携した観光地づくりをしていく。そうすれば、東三河に観光客を呼び込める。愛知県は、ノウハウ、歴史文化等の観光資源もあるので、それを生かした魅力ある観光地づくりをしてほしい。

- 豊川稲荷へ来る観光客を見ると、最近、観光バスが少なくなってマイカーに変わってきた。観光バスはツアー客ばかりで、食べ物、安売ツアーが多くなっている。全国を考えると、東三河の立地条件は最高の所にある。東京と大阪の中間点であり、その交流している人口は多く、これをどのように来させるかというのが課題であると感じる。各観光協会、観光課が積極的に中に入行って行かなければいけない。その際、県もこの中に入ってもらって、東三河がどういう役割分担で行くのか示してほしい。田原はどうするのか、豊川はど

うするのか、真剣に考えて行かないと伸びない。地元だと国府に県営ふるさと公園の整備が進められているが、御油の松並木とはバラバラで一体となっていない。お稲荷さんは580年の歴史がある。豊川で、その次の観光資源というと東海道の松並木である。豊橋地区の二川、豊橋、小坂井、国府、御油の旧東海道の松並木が残っているのはこの地域しかなく、お互いのつながりを含めて大きくPRしていくべきである。当然、この中には、「弥次喜多道中」の「狐にだまされて」などのストーリーがあるわけで、これらも使いPRしていくべきである。それに、休憩施設、隣接するお寺をどう紹介して行くかということで、大きいメリットがあると思う。

豊川の行く末を考えると門前町の育成なくしてない。門前町も高齢化してきた。現在、年をとって商売ができなくなった人には、出て行ってもらい、そこに新しい若いエネルギーを入れ活性化する必要がある。豊川で「通り」として残っているのは門前だけなので、この地で町おこしを行っていききたい。

産業観光としては、日本車両のリニア新幹線の工場見学を取り上げていきたい。

最近変わってきたのは、観光協会の事務局長を民間から募集したことである。過去は市の商工課職員で総会だけの観光協会であり、時代に合った動きができていなかった。民間から登用してやって行くのがベター。

東三河の祭りは大なり小なりその町の文化である。小さな祭りでも魅力があれば必ず来てくれる。ニーズはある。情報の発信をしっかりとやっていかなければと思う。

- 3つの要望、質問がある。渥美半島は海に囲まれた地域で、陸の孤島にならないように観光面に力を入れてもらいたい。

また、県の観光予算はどのくらいで、全国ではどのくらいの順位か教えてほしい。

渥美半島には温泉施設がないため、連携ということで蒲郡に行けば温泉施設があると紹介している。田原温泉や渥美フラワーパークがなくなるなど、観光施設が次第になくなってきているのが現状である。そうした中、温泉施設ができないかと言う声をよく聞く。観光のため、地域の活性化のために繋がる温泉施設を要望したい。田原区でもボーリング調査をして出ることは分っているが、区ではなかなか運営できないと言う話を聞いており、どのようにしたら良いか回答してほしい。

渥美半島は、国から「菜の花ロマン街道」の認定を受けている。しかし、ロマン街道の看板一つなく、旅行者が分るものがほしい。そして、地域全体として意識づくりと花一杯運動の推進が必要と思う。成功している事例があったら教えてほしい。

最後に、渥美半島に旅行者にインパクトを与えるものがほしい。何か良い提案があったら教えてほしい。

- 「おもてなしの愛知の実現」と「観光人材の育成」に興味をもった。愛知県の観光ボランティア連絡協議会が年1回あるが、県職員も出席して今日のような良い話、情熱的な話をしてもらおうと、皆が勇気づけられるし人材育成にも役立つ。

東三河だけの観光ボランティア連絡協議会は、10年程前に豊橋で全国大会を開催したときは年3回ぐらいやったが、その後途絶えてしまっている。三河又は東三河だけの協議

会もあるとよい。

最近、バスガイドがほとんど観光バスに乗らなくなったので、ボランティアガイドが重要な役割になってきている。我々も育成にがんばっているが、県の協力もお願いしたい。

- 小坂井町には観光協会がないため、NPOを設立し稲荷の朝市を中心とした活動をしている。稲荷の発展と観光を考え大きな鳥居も建てた。町に相談した際、町でも観光協会を作ったらという提案を出した。そうしたら、町には皆に見てもらえる施設もなく、考えるようにはいかないとの答えであった。

懇談会というのは、言葉のキャッチボールであるから、本日出席してみて市の皆さんがまちおこしに真剣に取り組んでいることが分かった。

- スケルトンを読んで、なかなか大変なものだなという感じを受けた。海というものは、三河湾という捉え方をされているが、遠州灘、表浜、地域では豊橋、田原にまたがる地域になるが、観光名所は多数あるので、観光客誘導を考えてみたい。是非三河湾に対する文章化をスケルトンの中で考えてもらいたい。

2点目として、手筒花火は奉納するものである。また、人に見せるものではなく社に向かって花火を上げる。したがって、正面から手筒花火を見ることは本当はいけないことであり、観客は横からの姿を見る。それが本来である。観光資源としての手筒花火であるが、現在、神社の祭礼時に行われるもので、豊川市や豊橋市の炎の祭典があるが、それ以外に年間を通じて手筒花火を情報発信できる案を練っているところで、通年で、例えば、毎週豊橋では手筒花火が見られると、そういった形になればと思う。

- これまで、実際にどうやって実行するのかと懐疑的であった。観光とは「遊び」だと思う。来られる人も「遊び」、やる人も「遊び」でなくては、そこに「遊び心」があるから、初めて皆楽しめるわけで、そういうことに対してどのように取り組むかが第一に大事で、行政側もやっぱり「遊び心」があって始めて成り立つ気がする。

そういう中で、活性化というのはまず地域である。それに対して行政側として観光行政を発展させていくかということになってくるかと思う。是非、観光予算を取ってもらい地域ごとにきちっとした金額を配分するようにお願いしたい。

豊川稲荷に来られる方は、豊川稲荷に来る前かお参りしてから泊まる。三谷温泉や西浦温泉、あるいは吉良温泉、伊良湖等に泊まることになるが、地域の連帯感というか、一緒にやるということがないと、せっかく持っている観光資源を生かすということ、観光に携わる方がやらないと、お客が来ない、全然だめだということになっていくのではないかと。地域ごとに、東三河なら東三河で連帯感をもって、観光についての会話をやっていくべきだと思う。

豊川稲荷も580年弱の歴史を持っているが、大変すばらしいものがある。入口から入って、今、金木犀、銀木犀が咲いている。これだってすばらしいことで新聞に載れば大変な数のお客が来ると思う。こうしたことも是非取り上げていただくとか、彫刻にしてもすばらしいものがあることにメスを入れていただいて、来てよかったと「また来たい」と、こ

ういうことを是非、皆で力を合わせてやるべきである。

- 渥美半島、伊良湖岬の現状が今、非常に厳しい状況になっている。観光客の数は約2割から3割ぐらい減、宿泊者も同じぐらいのレベルになっている。これは昨年10月のトヨタショックがあり、景気が非常に停滞してなかなかお客さまもお金を使ってくれないということももちろんあるが、一つの大きな要因としてアクセスの問題が非常に大きい。特に昨年から高速道路が土日1,000円という問題が起きてから、インターから30分から1時間以内のところは商圏でそれ以上になってしまうと、よほど宿のモチベーションがないとお客様を呼べない状況ということを知っている。

伊良湖岬に行くには、豊川インターあるいは音羽蒲郡インターから2時間近い時間がかかってしまい、観光客、特に宿泊のお客様が来ていただけないという現状がある。高速道路の関係で、今まで、それだけでなくも苦労していた伊勢湾フェリー、名鉄フェリーが、師崎から伊良湖岬、鳥羽から伊良湖岬へ来る乗降客が激減している。ピークのゴールデンウィーク、あるいはお盆でも前年の約3割から4割減という現状で、平日のほとんどは乗船率2割である。鳥羽市観光協会との話し合いでは、この状況というのは地域というよりも、構造的な問題があって、それをどうやってケアしていくのか。自分たちがいろんなことをやっても、吹き飛んでしまうぐらいのレベルにあるのではないか。

観光という大きな括りでいえば、渥美半島、田原市も、例えば「春の菜の花祭り」や、食をテーマにした「どんぶり街道」等をやって、一見日帰りのお客様、観光のお客様を見込めるが、滞在型になって行かない。滞在型にならないということは、お金をなかなか落としてくれない。ということで魅力的な施設づくり、あるいは宿づくり、地域づくりというものがあるが、その道路の問題、それから滞在型にしていくための仕掛けの問題が、個々ではどうしようもないようなニュアンスがあるような気がする。

愛知県というのはアクセスに恵まれている。確かに、新幹線の駅も3つあるし鉄道も通っている。ただし、渥美半島に関しては鉄道、バスの事情も非常に悪い。今まで豊橋から伊良湖まで直通バスが出ていたが、その路線が廃止になった。果たして路線バスで2時間掛かってお客様が来るのかということである。アクセスの問題だけではないと思うが、その対応、考えを聞きたい。

- 地域の特性を生かした観光地づくりということで、村おこしを地域で主体的に行っている。800戸程の者がお宮さんを運営しており、少しでも人を集めたい、賑わいを作りたいと、それが観光ということになると思う。自分たちの小さな村の中で村おこし、少しは活発にしよう、将来的には岐阜県の千代保稲荷の門前町みたいなものを作りたいと思って始めた。地域の活性化を主体的に取り組むとあるが、田舎の者に少し手を貸し、アドバイスをしてもらえらる県職員か、そういう方に相談すればいろいろなことを面倒みてもらえば、底辺の底上げにはなると思う。NPO法人を立ち上げたときも、法によるいろんな取り決めがあり2年も3年もかかったが、そのとき県のNPO法人支援部署にいろいろ指導してもらった。こういった村起こしについても、田舎者に分かるような手立てを、県がしてくれると底辺の押し上げになる。

- 蒲郡市は宿泊者目標を持って取り組んでいる。旅館が 20 数軒あるが、昨年 2 軒民事再生、本年度 1 軒、1 軒はスポンサーが分からずどうなるか分からないという中で、民間は本当に大変なことになっている。宿泊人員が大変厳しい中で中小企業は困っている。メンバーが少なくなる、外資が入ること、ホテル経営でない人が入ってくることは、宿泊施設にとってマイナスである。したがって、そのような現場のことをきちっと取り上げていかないといけない。

観光庁ができ、観光立国、また蒲郡市も観光交流立市を宣言しているが、お金を落とす人が来るか、設備をどうするかということである。蒲郡市には形原アジサイ祭りが 6 月に 1 か月あり、今年そこでホテルの里をやった。ホテルが飛ぶ、だから観光客が来る、静かな環境が整備され、いい所がある日突然、車が来て騒音、渋滞でトイレがない、そういうことはいいことではない。形原が何で良くなるかということ、6 月 1 か月間、駐車場の入場料収入があり、トイレもあり管理人もいる、そういうことが観光だと思っている。ただ単に観光客がたくさん来たから良いということではなく、金を落とすお客さんがどう来るかということ、どう金を取るかということが重要である。

インバウンドには反対である。今、蒲郡にインバウンドで来ると 1 泊 2 食 6,000 円のお客さんで経営が成り立つかということである。東アジアから来ればいいじゃないかという。確かにビジネスホテルは儲かっているところがあるかもしれないが、旅館は 5 人入るところを 2 人入ったら部屋は一杯でも営業収入は上がらない。そうした点でいうと、一番良いのは日本人で、宿泊単価の高い人が来ること。2 番目は安くても日本人、設備投資は要らない。3 番目は高い外国人、その次が安い外国人。お金もそうだがマナーの問題もある。大浴場に掛け湯をせずに入って、洗いもせずに出てくる。それを見て日本人はどう思うか。日本人はそのホテルを敬遠する。北海道に台湾から雪を見に来ている。その後ホテル経営は良くなっているか。別府の昔日本一の旅館に、台湾、韓国からどんどん来て、今どうなっているか。今は別会社である。そういうことで、インバウンドがすぐさまいいかというと、いい旅館もあるが、蒲郡としては警戒しながら、受入体制を整え、あるいは高いお客さんしか受け付けられないように考えている。したがって、観光について、金が落ちる、民間がそれで経営が成り立つということを是非考えてほしい。

ニューツーリズムの中に、産業観光、エコツーリズム、ヘルスツーリズム、グリーンツーリズム、長期滞在型がある。愛知県は来年 COP10 を受ける。受けて環境の世界体験。エコについては愛知県が一番進んでいる。そのエコツーリズムで蒲郡は受けようと考えている。是非そのようなことを汲み取っていただきたい。